

清酒発祥の地・伊丹の酒蔵でクラシック音楽を
 味わう酒蔵コンサート。今回は18世紀ウィーンの雰囲気を感じられるモーツァルトの楽曲を日本テレマン協会が演奏します。
 芸術の秋、酒蔵で一味違うサロンコンサートをお楽しみください。

延原武春 指揮



18世紀音楽を専門とする指揮者・オーボエ奏者。1963年にテレマン室内オーケストラを創設。彼らを率いて「文化庁芸術祭・優秀賞」（関西初）、「第17回サントリー音楽賞」等を受賞。1982年、初演当時の編成とベートーヴェンの指定したテンポで「第九」を演奏（世界初）。2008年にはベートーヴェンの交響曲全曲を、作曲者指定のテンポとクラシカル楽器を使用して指揮。この公演が引き金となってドイツ連邦共和国より「功労勲章功勞十字小紋章」が贈られた。2009年には大阪フィルに客演（民音主催）し、J.ブラームス：交響曲第1番を指揮。2010年～12年には同楽団は延原とともにベートーヴェン：交響曲全曲シリーズを主催。「『大阪フィルの次代を拓く』と言って過言ではない名演」等と絶賛を博するなど一際大きな話題となった。また、同時期に日本フィル横浜定期演奏会にも客演。その際のブラームス：交響曲第1番はEXTONレーベルからCD化された。2011年には延原の元に多くのプレイヤーが

集う「一日だけのオーケストラ」としてorchestraJapan2011が結成され、マーラー：交響曲第4番を演奏。その演奏はライヴノーツ・レーベルからリリースされ「レコード芸術」誌で特選盤に選ばれた。これらの成果が契機となってこのオーケストラは2012年にも再結成され、京都・大阪・神戸でやはりドヴォルザーク：交響曲第9番「新世界より」など、ロマン派のレパートリーを取り上げ、好評を博した。また、東日本大震災追悼・復興祈念コンサートとして、いづみホールでブラームス：ドイツ・レクイエムを、2014年、2015年と2年連続で演奏。2014年の公演はライヴノーツ・レーベルよりCD化され、話題となった。

高田泰治 フォルテピアノ



ドイツ在住。2003年神戸新聞松方ホールにてテレマン室内オーケストラとともにピアノ、フォルテピアノ、チェンバロのそれぞれの協奏曲を一夜で演奏するという公演にてデビュー。チェンバロ奏者としては2009年1月にレマーゲン（ドイツ）においてチェンバロコンサートが開かれ、当地の新聞からも高い評価を受けた。帰国後、J.S.バッハの「ゴルトベルク変奏曲」を好演し、今までの古典的な常識を破る新しい解釈の可能性を説得力のある演奏で示した。2009年9月にはオールJ.S.バッハプログラム、2010年7月にはJ.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」を日本テレマン協会の定期演奏会（東京）にて好演。これらオールバッハの公演（東京）における演奏内容がバッハ研究の総本山「バッハ・アルヒーフ」（ライブツィヒ）から高い評価を受け、2011年5月に同団体の定期演奏会にてJ.S.バッハ「パルティータ第2番」「イギリス組曲 第2番」などを好演。鍵盤奏者としては日本人初の出演となった。また同公演での演奏曲

目を収録したCDが10月リリースされた（ナミレコード）。現在はバロックヴァイオリンのU.ブンディースとデュオを結成しドイツでも演奏活動を展開中。フォルテピアノとチェンバロをC.ショルンスハイムに師事。また2012年よりA.シュタイアーに、2013年よりO.ポーモンに師事。2013年4月にはU.ブンディースとのデュオのCDをリリース。平成28年度咲くやこの花賞音楽部門受賞。2018年、J.G.グレーバー製作オリジナルフォルテピアノによる「ベートーヴェン・アルバム」CDが雑誌「レコード芸術」（2018年8月号）にて特選盤となる。2018年度音楽クラティッククラブ賞奨励賞受賞。令和2年度神戸市文化奨励賞受賞。

浅井咲乃 ヴァイオリン



テレマン室内オーケストラ ソロコンサートマスター。2010年、日本テレマン協会第195回定期演奏会（東京文化会館）にてヴィヴァルディ「四季」全曲を好演し「いま、もっとも聞きたい『四季』と言ってよい」（モーストリッククラシック2011年2月号）という評価を得る。2011年には延原武春指揮によるコンセプト・オーケストラ「orchestra Japan 2011」のコンサートマスターを務め、マーラー交響曲第4番を好演。ライブがCDとなり雑誌「レコード芸術」（2012年7月号）にて特選盤となる。2012年の日本テレマン協会第205回定期演奏会（東京文化会館）では「浅井咲乃が熱意にあふれた弓さばきで（ヴィヴァルディ作曲の）『ムガール大帝』の華々しいソロを弾きこなすと、大きな拍手と温かな空気が会場をつつんだ」（共同通信）と報道された。2015年6月に2ndアルバム「『よろこび』と『かなしみ』」をリリース。平成30年度咲くやこの花賞（音楽部門）を受賞。

鷺見敏 チェロ



テレマン室内オーケストラ首席チェロ奏者。バッハ「無伴奏チェロ組曲」をミントテラス（神戸）で2020年2月と2021年2月に分けて全曲演奏し好評を得る。2021年4月、第277回定期演奏会（大阪公演）ではベートーヴェン「三重協奏曲」の独奏を務め、「特にチェロの深く、分厚い、何かを必死に訴えるような音色が印象的だ」（『音楽の友』誌2021年6月号）と評された。2021年10月には日本テレマン協会独奏者である高田泰治とのデュオでバッハ「ヴィオラ・ダガンバツナタ」全曲をミントテラス（神戸）で好演。2022年には東京文化会館での日本テレマン協会第285回定期演奏会でバッハ「無伴奏チェロ組曲」全曲を好演。同年8月には渡辺し、レマーゲンでの公開公演に出演してバッハのチェロ組曲などを好演。京都市立芸術大学音楽学部を経て同大学大学院音楽研究科修士課程修了。これまでにチェロを向山佳祐子、上村昇、林裕、小川剛一郎の各氏に、室内楽を上森祥平氏に、バロックチェロの奏法とそのレパートリーについて、D. Póhl-Palm氏に師事。バロック音楽の語法を延原武春氏に師事。

テレマン室内オーケストラ ※クラシカル楽器使用

1963年に指揮者・延原武春が結成。延原の指揮のもとテレマン作曲「マタイ受難曲」、「ヨハネ受難曲」等数々の作品を本邦初演。その活動は高く評価され「サントリー音楽賞」、「音楽クラティッククラブ賞」、「大阪府民劇場賞」等を受賞している。2003年、ドイツの「バッハ・フェスティバル」でC.P.E.バッハ「チェンバロ協奏曲Wq1」を世界初演した。2007年にはクラシカル楽器によるF.J.ハイドンのオラトリオ「四季」を好演、「大阪文化祭賞グランプリ」を受賞。2012年よりドイツ人バロック・ヴァイオリン奏者ウッラ・ブンディース氏を首席客演コンサートマスターとして迎えた。2023年には協会創立60周年事業第300回定期演奏会で1829年のメンデルスゾーンによるバッハ「マタイ受難曲」蘇演を再現。その功績が認められ、令和5年度大阪文化祭賞を受賞。

